生　涯　の　大　事

竹　内　敏　晴　（南山短期大学教授）

今昔物語巻第十九にこんな話がある。

今は昔、讃岐国に源太夫という男がいた。気が荒く、殺生をこととし、人の首を切り手足を折らぬ日は少ないという有様。これがある日手下を連れて山を下りて来ると、お堂に大勢の人々が詰めかけている。なにごとだと聞くと、尊い坊さまが説教しているのだという。聞くなり源太夫はずかずかとお堂に入ってゆき、逃げまどう人々の間を押し分けて講師の前にどつかと座ると、さあこのおれにも納得できるようにしゃべってみろとわめき立てる。坊さまはがたがた震えながら、ここから西の方に有りがたい仏がおられて、年ごろ罪を重ねた人でも、ひとたび「阿弥陀仏」と唱えれば、必ず浄土に迎えて下さるのでございます、と説いた。

聞くなり源太夫、「おれの頭を剃れ、仏第子になる」と言う。坊さまは仰天して、いやそれは後ほど一族の方々とも御相談なすって……と言いかけると源太夫は、きさまは二枚舌を使うのか、今の今これほど有りがたいことはないとしゃべったことを、いざおれがやろうとすると邪魔する気か、と怒鳴りつけ、いきなり刀を引き抜いて、自分のまげをバッサリ切り落してしまった。さあ坊さまは怖しくて物も言えず、人々が騒ぎ立てば、外に待っていた源太夫の手下たちは、なにごとだ、と大刀を抜き矢を番えて駆け込んでくる。

源太夫は手下たちを「もう今からは、みな行きたいところへ行け、おれについてくるな」と叱りつけて、着物の衿おしひろげ「さあ剃れ」と怒鳴る。かくて出家した源太夫は着物を袈裟に替え、大音声をあげ、

阿弥陀佛よや、おうい、おうい。

と叫ぶとまつしぐらに西へと歩き出した。川にあっても峯にぶつかっても、倒れころびながら、ただひたすらにまつすぐ西へ西へと突き進む。

途中で行き当った寺の僧が、七日の後に後を追って行ってみると、高い高い

峰の海を見渡せる大木の二股の上に入道が坐って金鼓を叩き

　阿弥陀佛よや、おうい、おうい

と叫んでいる。

　いづこにおわします

すると海のざわめき中から

　ここにあり

と、うるわしい声がした。

　入道はそのまま呼びつづけに呼んで死に、口からは美しくあざやかな蓮の花が生えたという。

　生涯の大事とはこういうことだろうと私は思う。その人の生涯が、ただ一つの目覚めのために準備され、そして、それがやつて来た時、それがその人の全存在を引つ掴み、その果てに鮮かに、リルケ風に言えば、その人の死、大きな死が、顕われること。これより以上の生があろうか。「生涯教育」（学習ではない）ということばを聞いた時、即座に私の心に浮び上ってきたのはこの話であった。

＊

　生涯たぶんただ一度の、一瞬の転回、そこにその人が顕われ出る、むしろその時その人がその人に「なる」、いや生れ出る、ということ。これは、ドラマということの核心である。アリストテレスが「トラゴーディアとは」「始めあり中あり終りある」「一つの事件」を「模倣（描写）するものだ」と述べる「事件」とはこのようなものだ。日本でよく「テレビドラマ」といった言い方の中で予想されているのは、日常生活に起る一波が、万丈の波瀾を呼びさまざまな事件を引き超こしつつやがてもとの日常へ立ち戻ってゆく、というパタンだが、これは本質的に炉端で語りつぐ「物語り」の視覚化立体化であって、ドラマとは異る次元のことなのである。

　生涯を賭けた一瞬の転回、ということは同じトラゴーデイア論の用語を借りれば「急転と発見」ということになる。その代表例としてアリストテレスは、オイディプース王が国の災厄の原因はおのれ自身の犯した父殺しであることに気づく過程を挙げる。オイディプースは両目をえぐり出し、（この世のことはなに一つ見ぬ、見えぬものとなって）おのれの母と知らずに交って生んだ娘に手を引かれて去つてゆく。盲目の闇。人の生の立ち帰る源へ。

＊

　近代においては急転と発見において際立つ例の１つは「人形の家」のノラであろう

　私はこの数年の間に、南山短大の人間関係科の若い女性たちと、東京で「からだとことばのレッスン」を続けている二十歳代から四十歳初め位までを中心とする男女の人々と、六十歳代までを含む戯曲を読み続けるグループと、三つの場においてこれを講義しレッスンした。それぞれの年齢、生活体験によるノ

ラへの反撥や共感、あるいは夫が今の日本でも全く同様だとする嘆きなど、さまざまな反応が興味深かつたが、今それはおく。共通していたことの一つは女主人公ノラの名は高校生でも知っているにかかわらず、戯曲「人形の家」を読んだことのある人はめつたにいないこと、ただ女性解放のシンボルのようなものとしての通俗化されたイメージが多くの人の頭を占めていて、戯曲を読んでも実はそれを投影しているだけで、なかなかことば（セリフ）を読めない、ということであった。

――クリスマスのための買い物を一ぱい抱えた美しい若い夫人が、のどをふるわせて陽気に歌いながら帰ってくる、これが「人形の家」の幕開きである。新年が来れば夫ヘルメルはこの町の銀行の頭取に就任する。貧乏ぐらしもこれまでだわ、という幸福の頂上からこのドラマは始まる。そこへ旧い友だちのリンデ夫人が訪れる。気軽にひきうけたノラはかの女のために夫に頼んで銀行への就職がまとまる。だがそれによつて地位を追われる羽目になるクログスタットは、かつてノラが夫の病気を救うために借金した当の相手であった。かれはノラに夫へ職の回復を頼むよう強要する。かれはノラが切羽つまつて、亡くなつた父の偽署をしていたことを握っている。頼みを断わるなら夫にすべてをぶちまけると脅されたノラは、絶望的なある期待のうちにクリスマスの仮装舞踏会を迎え、狂つたように躍りまくる。クログスタットからの手紙が郵便受けに落ちる音。ヘルメルはそれを披きに書斎に入る。ノラは喘ぎ、死ぬために家をとび出そうとする――

息もつかせぬとはこういうことかと言いたくなるような、実にみごとな腕をイプセンは発揮している。冒頭華やかに明るい家庭の雰囲気に暗い影が射し始める、と、忽ちそれがぐいぐいとノラの首を締めつけてゆく。ほとんど通俗的なスリラーほどの技巧である。ギリシャ悲劇以来のドラマの基本型である、ただ二人の向いあう対話による各場面の構成も、それぞれが対話劇のお手本のような緊密さ。だが、この後ドラマは意外な展開を見せる。

まず、仰天した夫は、今まであれほどいとしんで来た若い妻を、偽善者、うそつき、果ては犯罪人ときめつけ罵倒する。その激昂の頂点で玄関のベルが鳴る。クログスタットの再度の手紙である。思いがけぬ借用証書の返却。夫は狂喜して「おれは助かつた！」と叫ぶ。さあ、もうすんだ！　わたしはおまえを許してやる。なにもかも元の通りになるよ。これからおまえの意志とか良心とかはみなわたしが代つてあげる。おびえた小鳥は安心しておやすみ、わたしがおまえを強い翼の下にかばつてやるから――

すべて一件落着である。通俗の家庭ドラマならここでめでたしめでたしで幕が下りるところである。当時も今も、多くの読み手（観客）はちよつとあつけに取られながらも、ホツと息をつく。ところが、

ノラは、再び現れる。もう寝たのではなかつたかといぶかる夫に対してかの女は、「わたしは（仮面の）衣裳を脱ぎました」と答え、ついで、「お座り下

さい、お話したいことがございますから。」この瞬間から「人形の家」の真のドラマは始まるのだ。言わばこれまでの激動に満ちた三幕は,これから以後の数ページのための準備に過ぎなかった。まさに、これがイプセンなのだ！

*

だが今は以後の展開を追うのはやめよう。少し前へ立ち戻る。ノラが死を決意して家を飛び出そうとした瞬間に夫がドアを開く。事実を知られたと知つたその時のノラのことばは

わたしを救おうとなさらないで！

次いで（いささか唐突に）

ああわたし、世界中であなたが一番大切なものだから——

そして

あなたが代りになつて苦しんではならないのよ。罪を引受けたりなさつてはいけないのよ！

その必死の訴えを耳にも入れず問い詰める夫の罵声が次々にノラを打つ——と——

（ヘルメルの顔を目を放さず見つめて、硬直したような表情でいう）そうだわ。まあ、——ようやくそれがほんとうに分りかけてきたわ。

以後、もはやかの女は口を開かぬ。ただ夫の顔をわき目もふらずに見まもり続ける。

この時、ノラになにが見えたのか？　いつたいなにが「ほんとうにわかりかけてきた」のだろうか。

この無限の奈落に落ちてゆくような一瞬、そしてその闇の底からやがて現れてくる急転と発見を、後にかの女はただ一言で述べる。

奇蹟がとうとう現れてきませんでした。そうして、あなたはわたしが思つていたような方ではありませんでした。

かの女がかたくかたく信じていた、待ちに待つていた「奇蹟」とはなにか。

あなたが世間の面前に進んでお出になつて、一切を引受けて、おっしゃるにちがいない、「おれが罪人だ」——と。

愛する人のために、あらゆる罪をおのれに引き受けて破滅する——凄じい愛の犠牲への期待。だが、その犠牲をわたしは甘受できない、それがおこつては大変と、「怖しくてわくわくしていた」ノラは、これをくいとめるため、死のうとしたのだった。

愛の犠牲を相手に求めることは、無限に愛されることの要請であり、目が眩むほどの美しさに酔うことであるが、また稚いほど無邪気な自己愛のふくれ上つた投影でもある。ノラの半身はそれを拒否し、躍り上って死へと走る。奇蹟への憧れと、その中に身を亡ぼそうとする絶望とのせめぎあい。

その光に満ちた闇は、夫の一喝によつて凝固する。亀裂が走る。輝かしい、愛に満ちた夫の像は、デスマススクの石膏の如く、ぼろぼろと崩れ落ちる。そ

して現れて来たもの——

トルヴァルトさん、わたしこの瞬間にはっきり悟りましたの。わたしはこの家で八年間、赤の他人と同棲して、他人の子供を三人生みました——。おお、もう考えるのもいや、いや！　わたしこの身を引裂いてしまいたい！

これは一般に気づきとか自覚とか呼ばれる次元のことではあるまい。現実がまざまざと目の前に立ち現れること、他者がその全存在をもつて立ち、そしてこちらの存在に突入してくることである。これは安易に呼ばれるような自我の目覚めなどではない。むしろ自我の崩壊である。ノラのことばによれば「あなた方は私に対して深い罪をお作りになりました。」「私はこんなからっぽの女になりました！」。ノラはただひとり茫然と立つ。家庭も宗教も道徳も、なにひとつかの女を支えるものはない。自分が生きている社会が全くわからない。「自分がどうなるか全くわからない」。かの女はよろめきながら、自分ひとりで考えるしかない、という荒野に歩み入つてゆくのである。

これを自由と呼ぶか——まさに。だがこれは大審問官（ドストエフスキー「カラマゾフの兄弟」）のことばを借りれば、苦痛に満ちた、人間には耐え得ぬことである——これから先、自分の自由な心をもつて、なにが善でありなにが悪であるか、ひとりで決めなければならぬ、などということは——。

もし自覚と呼ぶならば、それはかかる、つらい、のつぴきならぬ、荒涼たる廢墟のことである。源太夫が一瞬にまざまざと見たおのれもまた、阿弥陀佛に出遇わずば救われようのない、悪業の泥沼であつたであろう。

*

生きるとは学び続けることである、とは、ある修道尼がいのちを伝えようとした教え子たちに手渡したことばだと聞いた。林竹二氏はこれに加えるように、学んだことの証しはただひとつ、なにかが変ることである、と言われた。

生涯学習とは、これらの人々にとっては当然のこと、生きることそのものであった。演劇の世界では、東海道四谷怪談などの傑作を書き続けた四世鶴屋南北が、この作者名で活躍を始めたのは六十歳代半ばのことであるし、絵画の富岡鉄齋が濶達自在の宇宙を画布にくりひろげたのは八十に至つてからであると言われる。いやもつと私個人に身近いことを言えば、モスクワ芸術座の創始者で、スタニスラフスキー・システムの名において近代演技術の完成者と目されるスタニスラフスキーが、そのシステムと喧伝される方法をみずから根抵的に否定し、新たな方法を確立し始めたのはもはや七十才を過ぎた晩年であった。この新しい方法はかれの死後はじめてかれの僚友たち、モスクワ芸術座の俳優たちに知られ、かれらを驚倒させるのである。かれらの如き成熟や変容を凡愚の私が望み見るわけではない。ただ歩きつづけること、そして恵みよって、生涯の大事の一瞬に出遇うことを得たならば、身をやきつくさんことを志すだけのことである。

*

生涯教育ということばには私はどうもはつきりしたイメージを持てない。

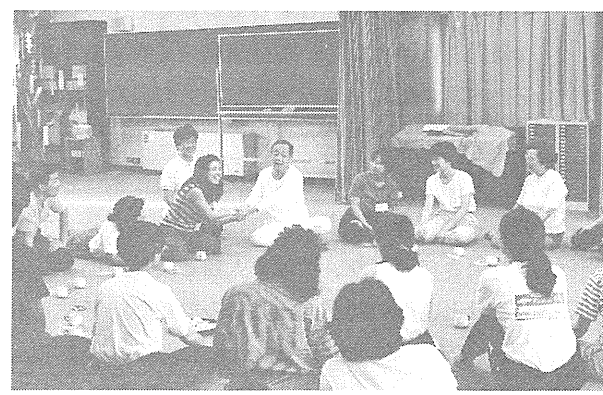
この場合の教育ということばには、人がおのれの主体においてなにかを獲得するために動き始めるイメージがなく、上から、ある「こと」を教えてやろうという姿勢が前提されているように感じられるし、そこまで行かずとも、学ぶ場を提供してやろうかという態度が透けて見える。いささか悪意をもつて言えば——

㈠には、急増する老齢者の、定年退職後の仕事を持てぬ生のためにいくらか高級な楽しみを造成し配分する必要があるという政策的配慮であり、

㈡には、そのための新たなレジャー産業の将来性、即ち知的分野の開発の可能性のリサーチの下請けにすぎぬのではないか、

という予感が私にはつきまとうのである。

私はカルチュアーセンターなる場で長年レツスンもして来たし、自身の主催するワーク・ショップに、多くの中、老年を迎えても来た。その関わりの中で出遇った、それぞれの人の、気づき、成長、変容のすばらしさに胸を打たれることが多かつたのは確かだ、それは、老若后性別職業その他にかかわらぬその人一個の選択によつて、レツスンに身をおき、身を投げかけたことの結果であって、教養とか生涯教育といつた思考の分野とは本質的に関わりのないことだと思われる。よくも悪しくも、その人一個の選びにおいて、

アランの未完の「定義集」を眺めていてふいに「ある日死によつて止つた最後の足跡」ということばが浮んだ。

アラシは生涯を高校の一哲学教師として終えたが、その授業のやり方は、生徒たちに一つのことばを投げかけて——たとえば「正義」とか「戦争」とか——その定義を作らせることから始めるのが常だったという。それを討議し訂正し補ってゆく作業のうちに、生徒の、そしてみずからの思考を鍛え、生きざまを吟味し、それまでのおのれの「定義」を発展——いや破棄することもあったかも知れないが——させて行った。その果の一部がここにある「ことば」たちだ。ここに、生涯学び続けるということの最も美しい形の一つが、ある。「教育」ということが「学ぶ」ということと一体となつている姿がここにある、と言うことも可能だろう。